

用水路の維持管理に携わる全国の土地改良区の方々へ一読のおすすめ！！

『城下町金沢の遺産 辰巳用水を守る』を読んで

岩崎和巳

百万石の城下町金沢市を訪れたことがありますか？

金沢市を訪れた方は兼六園に行き、記念写真を撮られたと思います。しかし、池の水が辰巳用水によって犀川の上流から運ばれていることをご存知でしょうか？

辰巳用水は寛永 9(1632)年に、加賀藩第三代前田利常の命により、板屋兵四郎によって建設されたと言われています。犀川上流の上辰巳地区に取水口が設けられ約 400 年にわたり地域を潤し、金沢城に用水を供給してきました。その間、地震、犀川の河床変動など様々な被害を受けましたが加賀藩の力で修復され明治維新を迎えました。

「城下町金沢の遺産 辰巳用水を守る一昭和・平成から未来へー」が、能登印刷出版部から、令和 2(2020)年 4 月 20 日に出版されました。本書は、平成 27(2015)年に設立された「NPO 法人辰巳用水にまなぶ会」の皆さんにより編集・発行されました。ぜひ、一読をお勧めします。「NPO 法人辰巳用水にまなぶ会」は、東京大学・金沢大学工学部において河川工学・水理学担当教授を務められ、さらに金沢学院大学特任教授として環境経済評価を担当された玉井信行氏を代表とし、金沢大学、石川県立大学、金沢学院大学の研究者、石川県・金沢市の行政経験者、コンサルタント等 57 名の会員で構成され、次のような設立理念の下で活動を行っています。

「2010 年に国史跡に指定された辰巳用水の約 400 年におよぶ歴史の重みを検証し、今後の用水の価値と評価を高めると同時にその維持管理を継続するために、金沢市民をはじめ多くの人たちに親しみを持って訪ねてもらえる方策を調査・研究し、まちづくりや生涯学習に寄与することを目的に、2015 年に設立。辰巳用水トンネル見学会の開催支援なども行っている。」

本書の主人公ともいえる辰巳用水土地改良区参事の畦地實氏は、戦後の昭和 21(1946)年以来、長年にわたり辰巳用水の現場の水管理に従事しており、土地改良区では余人をもって代えがたい存在でした。辰巳用水の将来への継承を考えると、畦地さんの知恵と経験を次世代に残すことが喫緊の課題でありました。辰巳用水にまなぶ会は平成 26(2014)年 10 月結成後ただちに畦地さんから聞き取りを開始しました。

平成 27(2015)年 8 月まで 6 回にわたって聞き取りを行ないました。まなぶ会では、対話を録音し、テープ起こしを行い、各回の聞き取り成果を課題ごとに整理し、後日現地調査や各種文献の探索・調査を行い取りまとめました。

まなぶ会の方々の的確な質問に畦地さんが答える形で、かつ脚注や各章の終わりに補足説

明、写真等を加え読みやすく理解しやすい工夫が凝らされています。

さらに本書の特色の一つは、質問者は標準語で、それに対する畦地さんの答えは「話し言葉」をそのまま残すように編集されており、畦地さんのやわらかで味のある金沢弁ですべてが語られています。

まず、辰巳用水に大きな影響を与えた出来事として次の事柄が読み取れます。

○寛永 9(1632)年の建設、○明治 4(1871)年廃藩置県により石川県管理となる、○明治 20(1889)年辰巳用水区域水利土功会、○明治 36(1907)年辰巳用水普通水利組合、○昭和 20(1946)年終戦、○昭和 24(1950)年農地解放(組合員は 260 人)、○昭和 27(1952)年辰巳用水土地改良区になる(農地面積は 84 町歩、組合員は 250 人)、○平成 22(2010)年、国の史跡指定を受ける。○平成 27(2015)年まなぶ会による聞き取り(農地面積は 20 町歩、組合員は 120 人)。

辰巳用水土地改良区となって約 60 年間に、農地は 1/4 に減り、組合員は約半分になる大きな変化がありました。変動の大きな要因は辰巳用水の地理的な位置が県都・金沢市中心部に隣接しており都市化の波が早くから押し寄せたことが読み取れます。

昭和 29 年から昭和 48 年頃までの高度経済成長の中、農村地域から若い働き手が流出し、昭和末から平成にわたり農業の後継者不足に悩まされました。その結果都市部に比べ高齢化が進行し、耕作放棄地も増加するとともに宅地等への転用が進みました。

このため、辰巳用水土地改良区内においても都市化・混住化が進み、家庭の台所や風呂・洗濯等の雑排水が増加し、用水路に流し込まれ自然浄化機能を上回り農業用水の汚濁化が進みました。畦地さんが日ごろから「わしの夢は辰巳用水を昔のようにきれいにすることや」が口癖でしたと言われる状況となり、これまでの農村では考えられない水路へのごみ投棄の増加により以前にも増した除塵作業が重くのしかかってきたことが理解できます。

この農業用水の汚濁は、辰巳用水の下流部では昭和 40 年代後半から広域下水道が計画・実施され、上流部では遅れて昭和末期から平成始めに農業集落排水事業の進展まで改善が進まず用排水施設の管理者の苦労が一段と過酷なものになった経緯が述べられています。

また昭和 45 年頃からコメ余剰が顕在化し米価が下がり、水田での畑作を可能とする水田の汎用化が求められ、畑作特に野菜・果樹等への畑地灌漑が要望され用水管理の一層の高度化が求められました。

さらに、農地および組合員の減少は、賦課金の減少を意味し土地改良区の経営難となり、畦地さん達の苦労が一段と増しました。

水路の管理では送水の優先順位が、廃藩置県までは金沢城への送水が、畦地さんの若いころは兼六園への送水を二の次にして田んぼ優先であったものが、近年は賦課金が減ってきて兼六園にウエイトを置いた送水管理が行われるようになってきた経緯がうまくまとめられています。

田んぼが減少したとはいえ、東岩取り入れ口でのゲートやスクリーンのゴミ上げ、水路の浚渫、28か所の水田への分土工である樋の管理、水路に投棄されたゴミ処理などの過酷な労働は、送水の優先順位などに関わりなく続けられており、史跡の維持・将来の利活用をどうするかが大きな問題となっています。

また、本書の最後の特別収録では、本書の内容を豊かなものとするために「まなぶ会」が企画し、金沢を文化都市に育てた山出保氏(石川県中小企業団体中央会会長・前金沢市長)と辰巳用水の管理に一生を捧げた畦地實氏の対談を、転載許可をいただいて収録しています。その内容は、逆サイホンの城中での再現の夢、汚れた用水からきれいな用水へという畦地さんの夢、これからの用水の管理は誰がするべきか、辰巳用水資料館の建設の夢、用水路に沿って遊歩道が整備された辰巳用水の将来の利活用、辰巳用水にまなぶ会への期待などについて語り合っています。

この書評の見出しに「用水路の維持管理に携わる全国の土地改良区の方々へ一読のおすすめ！！」と記しました。その心は、全国で日夜維持管理業務に従事されご苦労されている数千人の土地改良区の皆さんにぜひ読んでいただき、そのうえで皆さんの担当する施設の維持管理作業を引き継いでもらう後輩の方々のために、皆さんが関わった期間に経験された事柄を座談会形式などで取りまとめ、刊行するかどうかは別として、各土地改良区、各県の土地改良連合会に保管する運動を立ち上げて頂きたいと思うからです。

そして出来れば、それぞれの地方の文化ともいえる方言をふんだんに使っていただくと一段と意味のあるものになると思い提案する次第です。

最後に、これらの困難な編集・出版を手掛けられた「辰巳用水にまなぶ会」の各位に心からの敬意を表するとともに、心の籠った推薦文(本の帯に記載)を執筆いただいた元農業土木学会会長・元石川県立大学学長 丸山利輔先生に御礼を申し上げます。

岩崎和巳

2020年5月24日

東京都町田市在住

元農業工学研究所長